

SSSV 報告—ペラデニア大学訪問

歯学科3年 目黒史也

このたび、私は Short stay/Short visit program の一環として、スリランカのペラデニア大学を訪問した。期間は3/7から3/16というわずか10日ほどの短い期間ではあったが、十分に有意義な時間を過ごせたと思っている。

現地での様子を説明する前に、スリランカという国について少しだけ説明したいと思う。これはひとえに、「スリランカに行くんだってね。で、それってどこらへん？」と悪びれもなく訊いてきた私の友人のような方に、少しでもスリランカを理解していただきたいと思うためである。

スリランカはインド半島の南東に位置し、正式名称は『スリランカ民主社会主義共和国』である。また国民の約7割が仏教徒であり、そのため街の至る所に寺院が見受けられた。人口は2100万人ほどで、国土も日本の北海道くらいの国であるが、名物であるセイロンティーは世界中で愛され、イギリス王宮にも認められた品質である。私達がお世話になったペラデニア大学はスリランカ第二の都市、キャンディーに位置し、9つの学部と広大なキャンパスを有する立派な国立大学であった。

私達がスリランカに着いたのは現地時間で0時を過ぎた頃だったが、空港から出ると、やはり暑い。日本ではまだダウンジャケットが活躍する気温だったこともあって、そのギャップに驚くとともに、異国に来たのだ、という言い知れぬ高揚感を覚えた。ホテルまでは現地でお世話になった Sajiv 先生に迎えに来ていただいた。(この Sajiv 先生をはじめ、ペラデニア大学の先生方は、新潟大学に留学していたことのある人が多く、日本語が非常に流暢で、私達学生は本当に助かった。)

翌日は一日休みをいただき、3/10より、実際に

見学がスタートした。3/10にはペラデニア大学歯学部の学部長より歓迎の言葉をいただいた。その後、Dr. Shyama の案内のもと、歯学部の校舎と病院を見学した。校舎、病院ともに非常に開放的で、風通しの良い部屋になっていたため、部屋もエアコンがなくとも涼しく感じた。この日は運よく病理学教室にいた現地の4年生(スリランカの歯学部は4年制なので彼らは最終学年であった)と話をする機会を得たが、思うようにコミュニケーションが取れず、非常に悔しい思いをした。この思いは今でも私の心に重く残り、英語を学ぶ強いモチベーションとなっている。

13日から15日の3日間はそれぞれ口腔内科、小児歯科、口腔外科の診療室を見学した。中でも強い印象が残っているのは、口腔外科のオペ見学である。生まれて初めて手術着(私に合うサイズはなかったが)に着替え、オペ室に入り、乳児の口蓋裂のオペを見学した。何をしているのかはチンプンカンプンだったので同行した6年生に逐一質問し、そのオペを飽きることなく凝視し続けた。また、口腔内科では扁平苔癬と呼ばれる疾患や、白板症などの患者様を見学することができたが、担当した先生や、学生がしきりに口にしたのは、スリランカでは噛みタバコが嗜好品として浸透しており、これを原因とする口腔がんの発症率がきわめて高いということだった。私が驚いたのは、ともに見学をする学生の目が本当に真剣だったことだ。使命感と責任感に満ちた強い眼に、その時私はただただ情けなくなるばかりであった。

今回私達は期間の短さにもかかわらず、上にあげた病院の見学だけでなく、観光地に行ったり、学生と交流したりすることができた。これは現地の先生方と新潟大学歯学部の先生方、また事務の

方々のご尽力の賜物である。このような機会を与えてくれたことを本当に心から感謝している。

様々な体験の中で、私が特に痛感したことは、英語力の不十分さと私達の視野の狭さである。現地で友達になった学生たちは英語で授業を受け、英語の教科書を使っている。英語ができてもてはやされる日本とは、本当に天地の差を感じた。同時に、彼らは多くのことに関心を向け、自分の周

囲はもちろん、広く世界を見つめている。特別なやる気を彼らの言葉の端々から感じたわけではない。彼らが国を語る眼がすべてを物語っているようだった。

情けないなどと落ち込んでいる場合ではない。英語が難しいなどと文句を垂れている暇はない。今日も6,700km離れた地で、私の友達は前進しているのだから。



SSSV 報告—ガジヤマダ大学訪問

歯学科3年 遠藤 諭

私がインドネシアのガジヤマダを訪れて約1年が経とうとしている。時が過ぎるのは本当に早い。ガジヤマダ大学を訪問してから現在までもそうだが、インドネシアで滞在した2週間もあっという間だったという記憶がある。しかしその滞在していた時の記憶は今でも鮮明に残っていて、今回そのことについて簡単にではあるがまとめてみようと思う。

私が今回、この場をお借りしてお伝えしたいことは3つの事である。その3つの事について私はこのプログラムを通して感じ、強く心を動かされ今の自分もそのことを意識して生活している。それ故、ショートビジットの報告も兼ねてそのことについて皆さんにお伝えしたい。まず、1つ目は皆さんが思うインドネシアはインドネシアではないということである。これを読んでいただいている皆さんの中でインドネシアは発展途上国で全てにおいて日本に後れをとっていると思っている方もいるかもしれない。それは決して違う、というのが今回留学させていただいた自分の見解である。確かに医療の技術やライフラインの充実度でいったらそうであるかもしれない。しかし、逆に日本が負けているのではないかと思うところもあり、そしてなによりもそう簡単に比較することができるものではないというのがインドネシアに留学した私の感想である。このことを少しでも分かっただけのためには可能な限り、自分の視野を広げたいと思う方々には自分の生まれ育った文化と違う文化と触れてもらいたい。私は大学2年生の時にインドネシアのガジヤマダ大学に行かせていただいた。それまでは海外に行った経験はなく、その時に初めて生まれた国と違う文化がある場所へ行った。そこでまず感じたことはいかに自分が当たり前と思っていたことが当たり前ではないということである。これがインドネシアに着い



て最初に感じたことである。例えばのどが渴けば蛇口をひねればいいという概念が当たり前ではないことを初め、人々の生活の中心と云っていいほど宗教が生活の中に密接に関係していることなど本当に多くの初めての“当たり前”のことと出会った。これらを通して私は文化の違いについて深く考えさせられた。習慣が異なっているということは生活も違う。ということはそれを支えている思想や価値観が違う。そしてそれは根本にある文化が違うということに繋がってくる。宗教などが絡んで文化はつくられるが自分の知っている文化と違うものに接することでものさしは決して1つではないことを知っていただきたい。2つ目は歯科医療について世界に目を向けていただきたいということである。向こうへ留学した時に次に驚きを覚えたことはインドネシアの学生の意識の高さである。それは特に勉強に対してだけではなく国内そして国外の歯科医療事情に対していかに意識を向けていたことで感じる事ができた。それは向こうの学生と会話をしている時に感じたことである。例えばインドネシア国内ではクラウン・義歯など補綴分野の技術向上が急務である、と時あるごとに教えてくれ逆に日本の医療事情はどうか、と出会う人々に何度も尋ねられた。このことで向こうの学生の意識の高さを感じるとともにい

かに自分は自分の国の医療現状について知らないかを思い知らされた。3つ目は全ての事に対して目的意識をもって行うことで結果として自分に返ってくるものの量は変わってくることである。向こうで自分が出会った学生はみな全ての事に対して目標を設定して行動をしていた。これは文化の違いもあるかもしれないが、それまで漠然と課せられたものをこなしていた自分にとっては大きな差を感じざるを得なかった。

最後の方は漠然としたまともになりはなりましたが、私は今回このプログラムに参加をして本当によかったと思っている。これを読んで少しでも

SSSVに興味を持った方々にもぜひ志願して参加していただきたいと思う。百聞は一見にしかず、ではないが行ってみて初めて経験することは必ずある。

最後になってしまいましたが、このプログラムを国から勝ち取ってきてくださった前田先生、留学サークルの部長を務めて下さった魚島先生、インドネシアへ同行していただいた山村先生、留学にあたって準備をしてくださった学務の方々、そしてこのプログラムに関わってくださった先生方に感謝の意を述べてしめたいと思います。

本当にありがとうございました。





スリランカでの忘れられない体験、 皆さんにお伝えするために

歯学科4年 井 場 明日香

こんにちは。私は今年の春休みにSS/SVのプログラムでスリランカを訪問させて頂きました。そこでは多くの体験をさせていただくことができ、忘れられない思い出となりました。多くの方に感謝すると同時に、是非この体験を伝えていきたいと思っています。今年はスリランカのSV（ショート・ビジット）がないので、参考になるかどうか分かりませんが、最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

私が数ある大学の中でもスリランカのペラデニア大学にショートビジットしようと希望した理由は、スリランカは個人ではなかなか行けない国だからというもので、なんとも旅行気分で申し込んでしまいました。メンバーも発表されて私以外全員男子……なんてちょっとした驚きもありましたが、無事にスリランカにたどり着くことができました。

スリランカに着いた時、まだ寒い日本とは全く異なり、暖かくもわっとした、南国の空気を感じることができました。空港には現地の先生が迎えに来てくださっており、日本の国旗が描かれたなんとも友好的なバスでホテルへと向かいました。ホテルに向かう途中にたくさんの豪華な仏像が祭られていて、仏教を深く信仰している人が多い国だとすぐにわかりました。スリランカに着いたその日、ホテルで停電が起こり、怖くて私は泣きそうになりました(笑)。

大学での研修が始まると、自分の英語力のなさに大きく落胆することになりました。まず副学部長の話が聞き取れない……。こんなことならもう少し英語をリスニングとスピーキングに焦点をあてて勉強しておくべきだったと心の中で反省していました。そんな私にさえ、先生方は優しく接し

てくださり、さらに申し訳ない気持ちでした。

研修は大学見学から始まりました。ペラデニア大学は本当に広く、車やバスを使わなければ回りきれないほどでした。スリランカの人々は皆優しく、日本人は珍しいのかすれ違ふと微笑みかけたり手を振ってくれたりして、温かい気持ちになりました。日を改めて、今度は実際に臨床の現場を見学しました。最初は口腔外科の内科バージョンであるoral medicineというところを見学しました。噛みタバコの習慣がある国なので、その特有の症状をもった患者様が非常に多かった印象があります。次は小児歯科を回りました。最初に大学近くの小学校に行って、フッ素洗口を行なっている様子を見学しました。う蝕の予防が徹底的にされていて感動しました。小学生は本当に無邪気で可愛かったです。最後に見学したところは口腔外科でした。私は日本でまだ手術の見学をしたことがないのにも関わらず、スリランカで初の手術見学をさせていただくことができ、非常に恐縮しました。将来は口腔外科に行きたいと思っているので、一層見学にも気合が入りました。一緒に行った先輩から術式などを教えてもらい、大変有意義な見学でした。

専門外来の見学のみならず、学生との交流も楽しみました。英会話に自信がなかったものの、スリランカの伝統服であるサリーを着せてもらったり、学校を案内してもらったり、シンハラ語で行われる講演に連れて行ってもらったり、楽しい時間は本当にあっという間でした。先生方には休日に植物園や世界遺産に連れて頂いて、至れり尽くせりでした。

スリランカに行つての感想を言ってくれと言われたら、私は間違いなく「もう一度行きたい！」

というと思います。友達に会いたい、まだ見ぬ名所を見たいという気持ちもありますが、今度は歯科医師として、スリランカの医療に貢献したいという気持ちもあります。ショートビジットを通して、自分の歯科医療に対するモチベーションも上



スリランカに行ったメンバーです！お世話になりました！

がり、参加して大変よかったです。これからも国際交流を積極的に続けていきたいと思います。

夏になって、スリランカの美味しい紅茶が飲みたくなってきた今日この頃です。



スリランカのユニットです。日本との大きな差はないように思われます。



私のお気に入りの写真の一つです。学生同士の記念撮影。